Osaka University Knowledge Archive

Title	島津先生の御退官に当たって
Author(s)	後藤, 昭雄
Citation	語文. 1990, 53-54, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68802
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

島津忠夫教授近影

島津先生の御退官に当たって

後藤昭雄

島津忠夫先生が定年で御退官になる。大阪大学には丁度十年御在職になったのであるが、月並ないい方ながら、先生御自身も時の流れの早さを実感なさっているのではないかと拝察する。

定年を迎えられるのであるが、お見かけするところ、とてもそうは見えない。もし先生が冗談で十歳若く年を言われたとしても、誰もそのままに信じるであろう。お元気で、歩かれる時も早足で、いつも先頭を歩かれる。御一緒する我々が遅れないように、時に歩を速めなければならない。

学問の世界においても、島津先生は、そのように歩いてこられたと思う。先生の二つの歩みは似ているが、一つだけ大きな違いがある。道を歩かれる時の先生は、さっさっさと、あまり人のことなど気にせずに先を歩かれるが、学問の世界においては、御自身は先頭を歩きつつ、いつもまわりを見回し、ふり返っては、一緒に歩く人のことを、また後からついてくる者のことを常に気にかけて歩まれる。

時折、国文学以外の専門の人から、「島津先生の御専門は何ですか」といった質問を受けることがあった。そのような時、私は大体、「ハア、一応、中世文学ですが」と答える。この「一応」の意味は、この頃はやりの「一応、大学生ですが」などの「一応」とは違うのはいうまでもない。

先生の学問の大きさの最もなるものは、その幅広さにあると私は思う。確かに最もの御専門は中世文学であるといっていいであろうが、決してそれには止まらない。そのことは、ここでいろいろと述べるよりも、本誌に載せられた先生の「業績目録」(これとても主なものの抄出であるが)を見れば、ただちに了解されるところである。以前に、先生から、日本古典文学史を企図しておられることをう

かがったことがある。また、その嘗試的なお仕事はすでに果たされている。国文学の世界においても、学問の細分化、専門化が進行しつつある現在、一人で文学史を書くことは、その企てすらすでにまことに稀少なこととなっている。島津先生ならではのお仕事である。

島津先生の還暦のお祝いの会の時であったと記憶する。学生のT君が先生について次のようなことを言った。「国文学者の中で、偉い先生で一番きさくな人柄の先生は島津先生である。また、きさくな人柄の先生の中で一番偉い先生は島津先生である。」先生のお人柄を言い得た名言であると私は思うので、島津先生のお人柄を語るのに、このT君の言葉を借用させてもらいたいと思う。

先生は御退官後、あるいは名古屋へ戻られたりなさるのではなかろうかなどと、私は秘かに思ったりもしたが（箱根を越えられることはまずないと思ったが）、幸いにも関西にそのままおいでとのことである。おそらく今まで通りに学会や研究会にも熱心においでになり、御指導下さるものと思う。それにしても、島津先生のいらっしゃらなくなった大阪大学は淋しくなることであろう。

一九九〇年一月

（大阪大学助教授）